
インフィニットストラトス 3・2・1、フォーゼ来たー！！

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 3・2・1、フォーゼ来たー！ー！！

【Nコード】

N6513Z

【作者名】

ケン

【あらすじ】

宇宙大好き少年、織斑一夏と同じく宇宙大好き少女如月太陽が出会うとき青春スイッチが押される。

その手で宇宙をつかみとれ！！青春スイッチオン！！！！

プロローグ 初・変・身

一人の少年が縄で縛られ人質にされていた。

少年の名は織斑一夏。学校の帰り道でいきなり目の前に黒い車が止まり

黒服を着た男たちに無理やり車に押し込まれたわけである。

そして、隣にはもう一人少女が人質とされていた。

名は如月太陽。理由は定かではないが連れ込まれていた。

「ねえ、大丈夫？」

一夏は心配そうに少女に尋ねるが少女はけるつとした感じで答えた。

「うん。大丈夫だよ。誘拐なんてもうこれで何回目か」

「はは！ー緒だね。僕も結構な回数、誘拐されてるよ」

二人は何故か意気投合し、危機的状况にもかかわらず喋って笑っていた。

「ねえ、ここから二人で抜け出しちゃおか」

「出来るの？そんな事」

「見ててよ」

一夏は腕をくねらせていくと数秒後には縄が解けてしまっていた。

「おお！！凄い！！」

「君のもほどこいてあげるよ」

一夏は立ち上がり少女の縄もほどこき周りに男たちがいないのを確認してからその場を立ち去った。

「さて、ここからどうしようか」

「ん〜ひとまず、私のカバ」

少女が言いかけたとたんに壁が突然、爆発を起こし大穴があいた。

「きゃあー！！」

「な、何!?」

「見つけたぞ!!!くそ餓鬼ども!!!」

「げ!逃げよう!!!」

一夏は少女の手を取り走っていくが子供が大人を撒ける訳もなく一つの部屋に追い込まれてしまった。

「たつく!なんでこんなガキどもをあいつらはさらってくれなんて言っただのかね。ま、良いや。どうせ、お前らはここで死ぬから」

男性は服のポケットからスイッチの様なものを取り出した。形状はアイスクリームのコーンに似た形をしておりてっぺんには赤いスイッチがあつた。しかし、すぐに形状が変化した。

『ラスト・ワン』

「な、なんなの!?あれ」

「ひやははは!!!死ね、くそ餓鬼ども!!!」

男性がスイッチを押すと星座の様なものが浮かび上がり、男性が眉に包まれて

怪人から出てきて、精神がゾディアーツとなった。

「あの星座はうみへび座のゾディアーツ!!!」

「な、何なの!?そのゾ、ゾディアーツって」

「ゾディアーツ!!!それよりも私のカバンはないの?」

少女が部屋を見渡すと机の上にスーツケースの様な大きなカバンが見えた。

「あ、あつた!!!私のカバン!!!」

少女はその鞆を取り開け中からベルトの様なものが出てきた。

その形状はスイッチが4つくぼみに入っており右端にはレバーがあつた。

「死ね!!!」

ゾディアーツが大きな剣を召喚し二人を切りかかるが一夏が少女を横に押し出した。

「え?君!!!」

その剣は一夏に向け、まっすぐ降ろされた。

「あ、僕死んじゃうのかな。短い人生だったな。さよなら、お姉ちゃん」

一夏が目をつむり痛みには耐えるが一向に痛みは来なかった。

不思議に思い目を開けるとそこには、壁にまで吹き飛ばされうずくまっていた怪人がいた。

「くそ！！なんなんだ！？さっきの衝撃波は！！」

「もしかして…君！！」

「な、何？」

少女が慌てて一夏に近寄るとベルトを一夏に持たせた。

するとスイッチが突然、輝きだした。

「やっぱり。ねえ、君。まだ、生きたいよね？」

「……当たり前だよ！！僕は生きたい！！生きてまたお姉ちゃんに会いたい！！」

「うん。だったら、このベルトを使って」

「これを？」

「うん。これを使えばあいつを倒せる」

「うん、分かった。後僕は君っていう名前じゃない。織斑一夏だよ」

「私は如月太陽」

一夏はベルトを受け取りお腹のあたりに持っていくと自動的に腰に巻きついた。

「これ、どう使うの？」

「赤いスイッチを押してみて」

「う、うん」

一夏は4つの赤いスイッチを順番に押していくと音が鳴りだし4つ押すとカウントが始まった。

『3・2・1』

「え？え？」

「右のレバーを引いて」

「う、うん。えっと、変身!！」

一夏がレバーを引くと辺りに突風が吹き荒れた。

「く!!!」

「きゃ!!!」

風が収まるとそこには…

「な、何これ」

「それがフォーゼ!!!」

「フォ、フォーゼだと!?!ここで潰す!!!」

怪人が驚いたようにフォーゼの名を言うと剣を片手に襲いかかってきた。

「うおおおおお!!!」

「え、えっと。もう、どうにでもなれ!!!」

一夏がオレンジ色の1と書かれたスイッチを押すと音声の流れ右腕にロケットが現れた。

『ロケット・オン』

「おおおお!!!ほ、本物のロケットだ」

腕のロケットが本物の様にジェット噴射をし始め

一夏は怪人を巻き込みながら壁を突き破り外へと出ていった。

「うひゃ〜あれがフォーゼの力か〜」

「おおおお〜目、目がまわる〜」

「ふざけやがって!!!」

一夏はロケットの余りにも噴射が強く勝手に回っていたがそこに怪人が

勝手に突っ込み勝手に吹き飛んだ。

一夏はどうにかしてロケットスイッチをOFFにしたが酔ってしまった。

「あゝ気持ち悪い」

丁度、しゃがんだところに怪人の剣が過ぎていった。

「おりゃー!!!」

「ぐう!!!」

一夏は怪人に蹴りを入れて距離を取った。

「他にはこれだ!!!」

『ランチャー・オン』

右足にミサイルが搭載されたランチャーが出てきた。

「ミサイルといえばこれでしょ!!!」

『レーザー・オン』

ベルトの左のスイッチを入れると左腕にレーザーが出てきた。

「よし。ロックオン!!!喰らえ!!!」

ミサイルが勢いよく怪人に向かって発射され怪人に直撃し空中に上がった。

「うわあああああ!!!」

「よっしゃ!!!止めだ!!!」

『ロケット、ドリル・オン』

「このレバーを押すと」

『ロケット、ドリル・リミットブレイク』

レバーをもう一度引くとベルトから電子音声の流れ

左足のドリルが勢いよく回転しだした。

「喰らえ!!!ロケットドリルキーパーック!!!」

「ぐわあああああ!!!」

怪人はドリルに貫かれ大爆発を起こしスイッチを残して消え去った。

「おおおお目、目がまわる」

一夏はドリルが地面に刺さりそのまま回転をしていた。

「と、止まった」

「やったね一夏!!!」

隠れていた太陽が一夏の傍に嬉しそうにして近寄って来た。

「うん!!で、このスイッチはどうしたら」

「これはね。こうするの」

太陽がもう一度スイッチを押すと消滅してしまった。

「ひと先ず、もうすぐ迎えが来るから待っていようよ!!」

さつき、家の人を呼んだから

「うん、ん?」

一夏は突然、何かに気付いた様に後ろを振り返った。

「どうかしたの?一夏」

「いや、さつき誰かに見られてたような気が」

「誰もいないよ。気の所為でしょ」

「そうだね!!」

こうして二人は無事に帰る事が出来た。

プロローグ 初・変・身(後書き)

こんばんわ、ケンです!!

4作品目となる作品です!!

頑張っていきますので応援よりしくっす!!

プロローグ2 緊・急・事・態

ある建物の一室に丸い椅子に座り先程のスイッチを持った男性がいた。

目の前にはサソリのような姿のゾディアーツが跪いていた。

「報告を頼むよ、スコープオン」

「はい。下部組織からあれを所持している人間を捕らえたと報告が入り向かったところどうやら、あれは一人の少年の手に渡りさらにはフォーゼに変身しました」

「ほ。という事はその少年も関係者かい？」

「いえ。どうやら一般人の様です」

「何？」

「どうやら別の組織に誘拐された少年のいた場所が偶然下部組織と同じだったみたいです」

「そうか…これは面白い事になってきたな」

「如何しましょう」

「君には監視を頼みたい」

「かしこまりました」

一夏達はあれから無事に太陽の家族に保護され今は太陽の家で休んでいた。

「ひえ〜大きいんだね。太陽ちゃんの家って」

「そうかな〜？こんな物じゃないの？」

太陽の家は普通の一軒家に比べるとはるかに大きく

4階建てでさらには一部屋に一台テレビが置いてあった。

「太陽ちゃんの両親で何かしてるの？」

「……………」

「太陽ちゃん？」

「一夏が不思議に思い振り向いてみると太陽は涙を流していた。」

「た、太陽ちゃん！？どうかしたの！？」

「私のお父さんはね、私が小さい時に死んじゃったの。」

「う、ごめん」

「ううん。良いよ、一夏は知らなかったんだし。それで、お母さんはね」

会社の社長さんなんだって」

「お母さんのお仕事知らないの？」

「うん。お母さん、忙しくてたまにしか帰ってこないし帰ってきたとしても」

また、すぐにお仕事に行っちゃうし」

「じゃあ、この家には太陽ちゃん一人だけなの？」

「うん。家賃とかはおじいちゃん達が払ってくれてて家事とかは私が一人でしてるの」

「寂しくないの？」

「寂しいよ」

太陽は涙を手でぬぐいながら話しているが涙は一向に止まらずに服を濡らしていった。

「だったら僕が傍にいてあげる！！」

「え？」

「君が寂しいなら僕がその寂しさを和らげてあげる！！」

それにまた、太陽ちゃんゾディーアツに襲われてもいけないから僕がフォーゼになって護ってあげる！！」

「本当？」

「うん！！ほんとだよ！！」

「ありがと！！一夏！！！！」

太陽の笑顔に一夏は少し顔を赤くした。

それから、一夏は一旦家に帰り心配している千冬に無事な事を報告し

その翌日から一夏と太陽は一緒に遊ぶ間柄となった。

それから10年後、事態は一気に急変する事となる。
一夏は幼馴染となった太陽の家でテレビを見ていた。

画面には世界で初めて男性でISを動かした男、織斑一夏と表示されてお

どのチャンネルに回しても同じ顔写真が映っていた。

「不幸だ」

「いつからあなたはツンツン頭の神様の奇跡すら打ち消す
右腕を持つ少年になったのよ」

「は〜なんで俺あの時、部屋間違えたんだろ」

「自業自得ね。ほら、新スイッチのテストをするから
ラビットハッチに行きましょう」

「へ〜い」

一夏はフォーゼドライバーを持ち太陽と一緒にタンスに入ると
その中は月面基地、ラビットハッチに繋がっておりそこでは
太陽がスイッチの調整を行い、テストをするという事だった。

「じゃ、変身しちゃって」

「おっけ〜」

一夏はドライバーを着け赤いスイッチを押していった。

『3・2・1』

「変身!!!」

レバーを引くと一夏はフォーゼとなっていた。

「よし、今日テストするのはNO5のマジックハンドスイッチよ」

「了解」

一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチに交換しス
イッチを入れた。

『マジックハンド』

「よつと」

『マジックハンド・オン』

右腕に出てきたのは伸縮自在のアームが出てきた。

「へ〜これ伸びるんだな」

『まあね。それで、人も持ったり投げ飛ばしたりできるわよ』

「そっか〜にしても明日から一緒にIS学園か〜」

『そっね。一夏は嬉しい?』

「勿論。嬉しいに決まってるんだろ」

『そ、そっか。じゃあ、今日はここ迄にして明日に備えて寝よう!』

「!」

「了解」

明日はIS学園の入学式である。

どんな生活が待っているのかはまだ二人には分からない事である。

プロローグ2 緊・急・事・態（後書き）

こんばんわ、ケンです!!

連続更新でございます!!

感想もお待ちしております!!

それでは!!

第1話

大・遅・刻

ある部屋にけたましく目覚ましの音が鳴り響いていた。

「あく眠い。今何時だよ……なんでだろ。6という数字が8に見えるのは気のせいだろうか」

一夏はテレビのリモコンを操作し電源をつけると左上にはデジタル表示で8時15分とあった。ちなみにIS学園の登校時間は8時20分らしい。

「寝坊だ……！！！！！！！！」

織斑一夏の朝はこうして始まった。

一夏はあれから3分で準備をし愛車のマシンマッシンググラーというネーミングセンスゼロのバイクに乗りIS学園に向かっていった。テーブルには置手紙がありそこには、きれいな字で行ってるとだけ書かれていた。

「なんで太陽の奴見捨てたんだよ」

一夏はぶつぶつとぼやきながら運転していた。

「ああ、あれかIS学園は……ん？あれは」

遠くの方に青いISと赤色の何かが戦っているのが見えた。

「ちっ！！朝っぱらからゾディアーツですか」

一夏は校門を無理やりバイクで飛び越えたとゾディアーツに向かい最高速度で体当たりをし吹き飛ばした。

IS学園生徒会長の更識楯無は入学式も終わり教室に戻ろうとした時突然、ゾディアーツに襲われた。

「な、何あれ！？」

『更識楯無…許さない!!!!』

楯無は慌ててミステリアスレイディを展開し、武装を展開するが一方的にゾディアーツの怪光線を何発も喰らいエネルギーが減少していく一方だった。

「はあ、はあ、ISが圧倒されるなんて、あいつなんなのよ」

『ははは!!!生徒会長もこの程度か、死ね!!!!』

赤色のゾディアーツに体が青く光りだし怪光線が発射される瞬間に横からバイクが突っ込みゾディアーツを突き飛ばした。

『だ、誰だ!!!』

「who am I?」

『邪魔する者は全て潰す!!!!』

ゾディアーツはヘルメットをかぶった少年に殴りかかるがそれをかわし、

後ろに回り込み蹴りを入れた。

『きゃ!!!』

「き、君は一体誰なの?」

「いいのがあんじゃん。使わせてもらっぞ」

少年は楯無が先程まで使用していたソードを拾い武器として使った。

「さあ、行っけ、行っけ!!!」

少年はソードで何度もゾディアーツを切ってひくたびに火花が散っていった。

相手も攻撃を加えようとするがそれをさせる前にソードで切られていき

攻撃が出来なかった。

『あ、あんたISの武装を生身で使っとか異常でしょ!!!!』

「鍛えてるから」

『くそ!!!』

一夏が近寄ろうとした瞬間にゾディアーツは体から光線を出しその爆煙でどこかに消え去ってしまった。

「逃げたか…ありがとさん。これ返すわ」

「え、ええ。貴方一体何者なの？」

「俺は」

少年が言いかけた時頭に物凄い衝撃が伝わり

頭を抱えて蹲ってしまった。ヘルメットをしているのにも拘らず。

「馬鹿ものが。15であるにもかかわらずバイクを運転するな!!」

「げ!なんでここに」

振り向くとそこには織斑千冬がいた。

「ヘルメットを取らんか、一夏」

一夏はヘルメットを外すともう一度出席簿で頭を叩かれた。

「痛い!!何すんですか!!」

「遅刻の罰だ、馬鹿もの。さっさと教室に來い」

「へ〜い。じゃあな、名も知らない女の子」

一夏は千冬に連れられ教室に向かった。驚きの連続で

頭の処理能力が追いつかない楯無を放っておいて。

千冬に連れられた一夏は1組の前で止められた。

「ここが貴様の教室だ」

「へ〜い」

また、出席簿アタックを頭に当てられた。

「返事ははいだ」

「ひゃい」

一夏は頭をさすりながら千冬と共に教室に入った。

すると次の瞬間、とても甲高い声が教室中に響き渡った。

どうやら、自己紹介をしていたみたいだ。

「「「「「きゃー—————!!!!!!」」」」」

「千冬様よ!!!」

「私、ずっとファンでした!!!」

「お姉さまの為なら死ねます!!!」

「は〜毎年、毎年、私のクラスに馬鹿どもを集めているのか？
静かにしろ!!!小娘共!!!」

千冬の一括を喰らうと先程まであれだけ騒いでいた生徒全員が口を
閉じた。

「私の仕事は貴様らを優秀な操縦者にする事だ!!!」

私の言う事は全て聞け!!!理解できなくても頭につき込め!!!
良いな!!!」

「「「はい!!!」」」

「よろしい。授業に入る前に織斑、挨拶をしる」

「は〜い。俺の名は織斑一夏。趣味は天体観測。」

IS学園の生徒全員と友達になる男だ!!!よろしく!!!」

「「「.....」」」

「...まあ良い。さつさと座れ、授業を始める」

「あんたが自己紹介しろって言ったんじゃ〜」

「誰が立って挨拶をしるといった」

「心を読まないください」

こうして授業がようやく始まった。

授業の終了の合図の鐘が鳴ると同時に一夏は机にへばりついた。

「意味不。こんなもん理解できんのかよ」

「あなた以外全員理解してるよ」

「太陽か.....起こしてくれよ!!!」

「私は何度も起こしたけど起きない貴方が悪い」

「そうだけどさ〜」

「それよりも朝のゾディアーツの件だけど」

「ああ。目星はついたのか？」

二人は周りに聞かれない様にひそひそと喋り始めた。

「何人かはね。また、後で言うわ」

「了解」

太陽が席についたと同時に始まりのチャイムが鳴り響いた。ちなみに太陽の席は一夏の列の最後尾である。

「…なのでISを扱う時の罰則は国によって違うので注意しておいてくださいね」。時間もいい塩梅なので終わりにしましょう」

2時間が終わった時には一夏は見事に撃沈されていた。まったく内容が理解できずにスイッチをいじってたら千冬に出席簿で叩かれ

山田先生（1組の副担任である。ちなみに担任は千冬）に全部分らないと言えは

また、叩かれた。そのせいで頭皮がヒリヒリしていた。

「ちよつと、よろしくて？」

「あ？」

後ろを振り向くと金髪タテマキロールの少女が立っていた。

第1話

大・遅・刻（後書き）

こんにちわ、ケンです。

いかがでしたか？

今は学校で更新しています。

感想もお待ちしております。

それでは、さよなら

第2話 事・件・調・査

「ちよつと、よろしくて？」

「あ？」

「まあ！なんですよ。その返事は。私に話しかけられたのですからそれ相応の返事があるでしょう」

「お前誰だよ」

「知らない！？このイギリス代表候補生、セシリアオルコットを！」

セシリアは腰に手を置きながら威張った。いかにも女尊男卑の影響をもろに受け、威張っている女性の良い例だった。

「……太陽〱腹減った」

一夏はセシリアを無視して太陽のもとに食べ物を買うべく近づいていった。

「ちよ、ちよつと無視ですよ！？」

「悪いけど貴方みたいな奴、一夏は大っ嫌いだから無視する習性があるの」

「な、何ですよ！？貴方は！！」

「さっき自己紹介したでしょうが」

「太陽〱何か持ってないか？」

「何もないわよ」

「残念」

「あ、貴方達ねえ！！」

セシリアが言いかけた瞬間にチャイムが鳴り響いた。

セシリアはかなりご立腹の様で地団駄を踏みながら叫んだ。

「また、来ますわ！！！！」

そう言いズカズカと座席に戻り一夏も座席に戻っていった。

「では、授業を始める。あ、その前にクラス代表を決めないとな」
千冬が思い出したかのように言い始めた。

「クラス代表はまあ、言えば委員長のようなものだ。生徒会の会議などにも

出席してもらおう。一度決まれば1年は変更できないから注意しろ。

誰かいないか？自薦、他薦どちらでも構わんぞ」

少し沈黙が流れた後に一人の女子生徒が手を挙げた。

「はい！織斑君を推薦します！！」

「あたしも！！」

一気に教室のほぼ全員が一夏を推薦する状況となった。

「そんなの納得がいきませんわ！！」

セシリアが机を叩いて勢いよく立ちあがった。

「本来クラス代表はクラスで最も強い人になるものなのに

そんなISに関しては全くのド素人でさらには知性も、

ないような極東のサルに任せてはいい恥さらしですわ！！

いいですか！？私はここにISを学びに来ているのです！！

サーカスを見に来ているわけでは」

セシリアが言いかけた瞬間に、顔の横を何かがものすごい速さで

通り壁にぶつかった音が響いた。

生徒全員は青ざめながら、中には体を震わし恐怖を示す生徒もいる

中で

何かを壁に投げた張本人の方向を見た。

「さつきからゴチャゴチャとうるさいな〜イギリスも

飯マズ王者の座に何年居座ってんだよ」

「わ、私の祖国を侮辱しますの！？」

「あんたが先にしたんでしょうが」

後ろから声が聞こえたかと思うと太陽が立っていた。

太陽も相当いらついでるらしく声にいらつきが混じっているのが
こちらからでも分かった。

「私は侮辱などしていませんわ!!」

「自分の事は棚上げか。代表候補性が聞いて呆れるわね」

「こんなやつがクラスメイトかと思うとこの先が思いやられるな」

「け、決闘ですわ!!」

「私はパスね。体弱いからISで戦えないし」

太陽は生まれつき体が弱く運動などは一切できない虚弱体質だった。

しかし、なぜかISの適正はBなので合格したが

来年は整備課に進もうとしているらしい。

「俺もいや。どうせ俺が勝つし」

「あ、貴方ねえ!!」

「そこまでにしろ、馬鹿ども。立候補者は織斑とオルコットに

兩名だ。二人は来週に模擬戦をして勝ったほうがクラス代表になれ。

意義は認めん!!それと織斑、机は投げるもんじゃないぞ」

一夏の席には机があるはずなのだが机はなく後ろの壁に投げられていた。

その光景を見た女子生徒は顔を引きつらせ心の中で、織斑君は怒らせてはいけない

という1組特有の暗黙のルールが完成した。

こうして来週に模擬戦をすることが決まった。

放課後、一夏は帰り支度をしていた。

IS学園は全寮制なのだが寮の部屋がまだ、決まっていないうので

1週間は自宅登校となっている。

「一夏、帰るよ」

「太陽は確か寮じゃなかったのか?」

「そっだよ、一夏もだよ」

「いや、俺は」

「さっき山田先生から聞いたんだけど政府からの通達で

寮住まいにしろつてさ。それで、一夏は私と同室だよ」

「分かった。ついでに部屋であるの件について話すか」

「おっけ」

一夏と太陽は自室に入るとなぜか、部屋にタンスがあった。

「なんでここにこれがあるんだ？」

「ラビットハッチに繋がってるのはこれだけだからね。運んでもらった」

「ん〜了解。じゃ、入るか」

二人は玄関のドアのカギが閉まってるのを確認し

タンスに入るとその中はラビットハッチに繋がっていた。

中は案外広く、着きに出られる出口やアストロスイッチを調整する調整室に一夏がテストをする部屋もあり

テーブルや椅子も完備されていた。

「まず、あのゾディアーツはオリオンゾディアーツよ。

スイッチャーの目星は今のところ二人」

太陽は持っていたカバンを開けるとそれは普通のカバンではなくアストロスイッチを収納できさらにはデータ分析もできる特殊なものだった。

「襲われた人を考慮に入れると怪しいのはこの会長の妹の

更識簪、それともう一人は3年の鶴見桜。理由は妹さんのほうは

姉との間に溝があるの。3年のほうは更識楯無の事を何故か憎んでいるわ」

「その理由は？」

「まだ、分からないわ。情報が少なすぎるわね」

「ん〜なら、俺も探してみるか」

一夏は椅子から立ち上がり出口へと向かっていった。

「どこに行くの？」

「ちょっと事情聴取。太陽は引き続き頼むわ」
「了解」

一夏は今、生徒会室の前にいた。

理由は会長の楯無に話を聞くためであった。

「失礼しま〜す」

「は〜いつて君は今朝の」

生徒会室には楯無一人だけが椅子に座っていた。

「あんたに聞きたいことがあるんだけどいいか」

「ええ、いいわよ。座って」

「ひとまずあんたに聞きたいのは鶴見桜の事についてだ」

「鶴見さんがどうかしたの？」

「あんたさ〜鶴見ってやつに恨みとか、かわれてないか？」

「……」

楯無は何か思い当たる節があるのか苦い顔をしていた。

「何かあるのか？」

「ええ、まあね。あれは去年の話ね。彼女は前の会長よ」

「ふんふん」

「ここの会長は最強の人がなるものなんだけど、私はその人と勝負して勝っちゃったのよね〜」

「別にそれだけなら」

「でも、その勝ち方がいけなかった。みんなの前で私はその人に圧勝しちゃったのよ。それで、その人はみんなに」

「みんなに笑い者にされたというわけね。2年のくせに1年に負けた奴っていうことで」

「うん。それで何回も謝りに行ったんだけど取り合ってくれなくて」

「そういうことね…あんたは仲直りしたいのか？」

「勿論よ。このまま、うやむやにしちゃいけないし」

「だったら俺に任せろ」

「え？」

「俺にいい考えがある」

「夏は自分の考えに自信があるのかその顔は
余裕に満ちていた。」

第2話 事・件・調・査（後書き）

こんばんわ、ケンです。

如何でしたか？できれば感想を頂ければ幸いです。

作者自身は感想でパワーアップしますから。

ま、感想を送るのは読者の皆様なのでこんな事を言ったら

駄目ですね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6513z/>

インフィニットストラトス 3・2・1、フォーゼ来たー！！

2011年12月23日00時56分発行